

脱原発世界会議2012YOKOHAMA セッション報告書

- 企画タイトル A-2「コミュニティ・パワーが創り出す100%自然エネルギーの世界」
- 日時 1月14日(土) 18:00～19:30
- 場所 1Fメインホール
- 企画参加人数 約1,000名
- 企画団体 環境エネルギー政策研究所(ISEP)
- 文責 古屋将太(環境エネルギー政策研究所)
- 登壇者
 - 古屋将太／環境エネルギー政策研究所、研究員(司会)
 - エリック・マーティノー／環境エネルギー政策研究所、研究部長
 - クリストファー・スティーブンス／オンタリオ持続可能なエネルギー協会、事務局長
 - ハンス・クリスチャン・ソーレンセン／ミドルグルンデン風力協同組合
 - 原亮弘／おひさま進歩エネルギー株式会社、代表取締役

・報告

セッションA-2では、自然エネルギーがもっている可能性を理解し、実際にどうやって地域で取り組みを進めていけばよいのか、手がかりを探ることを目的として、国内外から4人のスピーカーがプレゼンテーションをおこないました。

まず、ISEP研究部長のエリック・マーティノー氏から、世界の自然エネルギーの現状について、成功した政策の普及が進んだことにより投資額や導入量が年々加速していることが述べられました。また、世界の150人以上の自然エネルギー関係者におこなったインタビューの結果から、今後エネルギーのビジネスモデルがますます変化していくことが予想されており、そのような未来に向けて私たちの「マインドセット」を変えていくことの必要性が指摘されました。

次に、オンタリオ持続可能なエネルギー協会事務局長のクリストファー・スティーブンス氏から、カナダ・オンタリオ州におけるコミュニティ・パワーの取り組みについて報告がおこなわれました。オンタリオでは、学校での太陽光発電の事例に代表されるように、地域のさまざまな人々が対話を重ね、持続可能な地域の未来像を共有し、それを具体化するプロセスを作り出していることが示されました。

次に、デンマーク・ミドルグルンデン風力協同組合のハンス・クリスチャン・ソーレンセン氏から、コペンハーゲンの洋上風力協同組合の取り組みについて報告がありました。デンマークでは風力発電の約80%が協同組合の形態でおこなわれており、プロジェクトに関わる地域の人々が、少しずつ出資しながら、騒音や景観への影響に不安をもつ人々との対話を重ね、民主的な方法で実施されていることが示されました。

次に、長野県飯田市のおひさま進歩エネルギー株式会社代表取締役の原亮弘氏から、地域で実践してきた市民太陽光発電事業について報告がありました。おひさま進歩エネルギーは市民出資によって資金を調達し、市内36ヶ所の公共施設に分散型で太陽光パネルを設置し、その電力を供給するビジネスモデルを組み立て、実際に事業を成功させました。当初の困難も行政やパートナーの協力によって乗り越え、現在では民間事業所や一般家庭にも設置する新たなビジネスモデルを開発し、まさに地域が一体となった取り組みを展開していることが示されました。

これらの報告の後、フロアの参加者との質疑応答がおこなわれました。最初に「自然エネルギーを作る側（供給）と合わせて、エネルギーを使う側（需要）はどのようなことに取り組みばいいのか」という点について、スピーカーにコメントが求められました。これについて、スピーカーからはエネルギー利用を効率化する取り組みが経済的に有利になるように政策で支援することや、熱需要に対して太陽熱温水器の利用を進めること、また、建築については「パッシブハウス」や「ゼロエネルギーハウス」といった新しい考え方が具体的な選択肢になってきていることが述べられました。重要な点として、「どのようなエネルギーを使わなくて済むのか？」を考える必要があるとのコメントがありました。

次に、「日本ではどのような自然エネルギーの選択肢があるのか？」という質問が出されました。これについて、スピーカーからは風力・太陽光・小水力・バイオマス・地熱・海洋エネルギーなど、日本には豊富な自然エネルギー資源があるということが述べられました。バイオマスについては、林業廃棄物からつくるペレットを燃焼させて熱利用することが北欧では広く普及していることが述べられました。そして、これまで都市にエネルギーと食糧を供給してきた福島が被災地となっていることを真剣に受け止め、復興にあたっては福島の人々が取り組む自然エネルギーのコミュニティ・パワー・プロジェクトに都市の人々がさまざまなかたちで積極的に支援していくべきとのコメントが述べられました。

次に、「工場ではどのようなエネルギーを選ぶのがいいのか？」という質問が出されました。これについて、スピーカーからは、自家発電設備があつてなおかつ生産プロセスで熱を使う工場であれば排熱を利用することでエネルギー効率を2倍以上に高めることができるとのコメントや、屋根に太陽熱温水器を設置して、太陽の熱を生産プロセスに利用する方法があるとのコメントが述べられました。

このセッションでは、いまや自然エネルギーは十分に実現可能な技術であり、それは地域のさまざまな人々が協力して取り組むことが重要であり、そして、その成功事例は国内外に豊富に存在することが確認できました。今後多くの地域でコミュニティ・パワーのイニシアティブが立ち上がり、地域のエネルギーを地域の人々が変革していくことで脱原発は可能となるでしょう。このセッションをきっかけに、参加者・視聴者が新たな一歩を踏み出すことを登壇者一同は期待しています。



(写真:佐藤秀明)